



福祉がかわれば社会がかわる

福祉をかえる「アート化」 セミナー ガイド

福祉がかわれば社会がかわる

福祉をかえる「アート化」 セミナー ガイド



はじめに

たんぼぼの家では、障害のある人たちのアート活動を支えるさまざまな活動に取り組んでいます。その活動の一環として、福祉の現場でアート活動に取り組む意義や、それぞれの活動で使えるノウハウを共有する「福祉をかえる『アート化』セミナー」を開催してきました。セミナーでは各地の実践者を招き、具体的なサポートや環境整備について学びあうだけでなく、異なる分野の方とともにアートによって地域にアプローチする事例を共有したり、創造的な福祉のあり方を考える場をつくってきました。

ここ数年、新型コロナウイルス感染症の影響により、対面で学び合う機会が減っています。そのような状況でも、各地の現場で工夫をしてアート活動に取り組んだり、この機会にあらためて自分たちの活動を見直し、いまできることに前向きに取り組んでいる人たちもいます。

福祉の現場は人と人が相対して生活や仕事、そして表現が育まれる場所です。個人が社会とつながるきっかけもまた、他者との交流のなかにあります。物理的にも精神的にも人や環境との距離感が大きく変わるなか、これまでとは違う距離感にとまどいながらも、社会とつながる道筋をアートによってつくりだすことをめざしています。

このガイドは、2022年にオンラインで実施した「アート化」セミナーの様子と、これまでの活動をまとめたガイドです。このガイドを開いたみなさんと、創造性を生きる力にかえる知恵を共有したいと思います。

一般財団法人たんぼぼの家

CONTENTS

はじめに この本の使い方

しごと p7-14

- 1** 講 師＝原田啓之（PICFA）
聞き手＝岡部太郎（一般財団法人たんぼぼの家）
- 2** 講 師＝武田和恵（やまがたアートサポートセンターら・ら・ら）
聞き手＝坂野健一郎（新潟アール・ブリュット・サポート・センター NASC）

学 び p15-24

- 3** 講 師＝滝沢達史（ホハル代表／アーティスト）
聞き手＝内山尚子（たんぼぼの家相談支援センター）
- 4** 講 師＝佐竹真紀子（美術作家／一般社団法人 NOOK）
講 師＝伊藤光栄（エイブル・アート・ジャパン東北事務局）
聞き手＝森下静香（GoodJob! センター香芝）

コミュニケーション p25-32

- 5** 講 師＝西 翼（運動会協会 理事、山口情報芸術センター [YCAM] キュレーター）
聞き手＝小林大祐（GoodJob! センター香芝）
- 6** 講 師＝菅原直樹（OiBokkeShi）
聞き手＝佐藤拓道（たんぼぼの家アートセンター HANA）

福祉をかえる「アート化」セミナーこれまで p33-35

- 「福祉をかえる『アート化』セミナー」の20年 森下静香（GoodJob! センター香芝）

アート化セミナー活動年表 2002~2022 p36-43

障害とアートの相談室 p44

発行物のご案内 p45

プロフィール

しごと 1 原田啓之 (PICFA)

兄に知的障害があり、障害とは何かを横目に育つ。高校時代はソフトテニスで日本一になるも、福祉を変えたいと日本福祉大学に進学、卒業。音楽とアートを仕事にする JOY倶楽部に 15 年勤務後退職。2017 年に鹿毛病院内に「PICFA」を立ち上げ勤務。創作活動を「お仕事」として位置付け、企業とのタイアップなどグローバルに活動中。

f <https://www.facebook.com/picfa.kagehospital/>

in @picfapicfa



しごと 2 武田和恵 (やまがたアートサポートセンターら・ら・ら)

東北芸術工科大学デザイン工学部情報デザイン学科卒業。学生の頃たんぼの家にボランティアに行き障害のある人のアートに触れ、障害のある人に関わりたい一心で山形市の福祉施設に勤務。2012 年から一般財団法人たんぼの家、NPO 法人エイブル・アート・ジャパンの東日本復興支援プロジェクト東北事務局として障害のある人の仕事づくりや芸術活動支援事業に携わり、中間支援やコーディネートの重要性を実感。2018 年より現職。

<https://www.y-aisenkai.com/info/lalala/>



しごと 2 坂野健一郎 (新潟アール・ブリュット・サポート・センター NASC)

新潟県佐渡市出身。2006 年に社会福祉法人新潟県社会福祉協議会に入職。主に地域福祉部門に配属され、ボランティア活動の推進や市町村社協との協働事業、生活困窮者自立支援事業などを担当する。2017 年 1 月に社会福祉法人みんなでききるに入職。2017 年 6 月より現職。びっくりするぐらい不器用なので展示業務はできません。

<https://www.niigata-artbrut.net/>



学 び 3 滝沢達史 (ホハル代表／アーティスト)

1972 年生まれ。多摩美術大学油画専攻卒。山に登る、子どもと遊ぶ、快通を求む美術家。2018 年西日本豪雨で被災した子どもの学び場「ホハル」代表。ひきこもり・不登校の子どもたちとの活動「アーツ前橋・表現の森」や、子どもの主体性に任せた表現活動「カマクラ図工室」などにも取り組んでいる。2018 年 4 月、放課後等デイサービス「ホハル」を立ち上げ、障害のある人もない人も一緒に居られる社会を目指す。

参照 <https://co-coco.jp/news/viva/> (マガジンハウス「こここ」)

<https://www.hoharu.com/>



学 び 4 佐竹真紀子 (美術作家／一般社団法人 NOOK)

美術作家。一般社団法人 NOOK理事。1991年宮城県出身在住。武蔵野美術大学大学院修了。2018年よりエイブル・アート・ジャパンの SOUPの事業に参加、アトリエつくるでのファシリテーターやスウプノアカデミアのコーディネーターとして関わる。仙台市沿岸部にバス停留所を模したオブジェを設置するプロジェクトを、2015年より継続中。地域の人びとと協働しながら、風景の記憶を聞く場づくりも行っている。

<http://nook.or.jp/hp/>



学 び 4 伊藤光栄 (エイブル・アート・ジャパン東北事務局)

宮城県塩竈市出身。東北福祉大学卒業。2021年よりNPO法人エイブル・アート・ジャパンで働き始め、生涯学習事業「スウプノアカデミア」の運営を担当している。

<http://www.ableart.org/>

SOUP <http://soup.ableart.org/>

 @soup.miyagi



コミュニケーション 5 西翼 (運動会協会 理事、山口情報芸術センター [YCAM] キュレーター)

2017年まで約 5年、山口情報芸術センター [YCAM]でキュレーターとして在籍したのちにフリーランスとなる。2015年「YCAMスポーツハッカソン」、「未来の山口の運動会」の立ち上げをおこない、フリーランスとなった後も毎年企画運営に携わる。2017年から一般社団法人運動会協会理事。大阪、東京、京都、福岡など各地で「未来の運動会」を実施。2021年 4月に YCAM に復職。

<https://www.undokai.or.jp/>

 @udka_



コミュニケーション 6 菅原直樹 (OiBokkeShi)

俳優、介護福祉士。「老いと演劇」OiBokkeShi主宰。平田オリザが主宰する青年団に俳優として所属。2010年より特別養護老人ホームの介護職員として勤務。2012年、東日本大震災を機に岡山県に移住。2014年「老いと演劇」OiBokkeShiを岡山県和気町にて設立し、演劇活動を再開。並行して、認知症ケアに演劇の手法を活用した「老いと演劇のワークショップ」を全国各地で展開。

<https://oibokkeshi.net/>

 @sekiseita



この本の使い方

「福祉をかえる『アート化』セミナー」は、2022 年で開催 20 年目を迎えました。今回、福祉施設関係者をはじめ、アートを中心とした各分野で活躍する専門家をゲストに迎え〈しごと・学び・コミュニケーション〉という 3 つのテーマに沿って、6 日間に渡り、6 名のゲストの方をお迎えし、オンラインセミナーを開催しました。

このガイドは、オンラインセミナーの視聴ガイドとして活用いただくことを目的としています。

各回で語られたプレゼテーションやディスカッション、前提となる社会状況と聞き手の感想をコンパクトにまとめました。登壇者紹介頁に記載された QR コードを読み取っていただくか、リンクにアクセスいただくと、アーカイブ動画を有料でご覧いただけます。すでにご視聴いただいた方は、あらためてアーカイブを見なおしたり、他の気になるプログラムをご視聴いただくきっかけになれば幸いです。

ガイドの後半では、これまでの「アート化」セミナーの活動年表やコラムをとおして、これまでのセミナーを振り返ります。この 20 年のテーマの変遷は、社会状況の変化を見ながらわたしたちが試行錯誤し、大切なものはなにかを考えてきた変遷でもあります。本書をとおして、福祉がアートと出会うことで社会をかえるきっかけになる、その可能性をともに感じていただければ幸いです。

セミナーの視聴期限は2023年3月31日です。

『福祉だからこそできること』

講 師 = 原田啓之
(PICFA)

聞き手 = 岡部太郎
(一般財団法人たんぽぽの家)



しごと 「福祉だからこそできること」

このセミナーのご視聴はこちら

Presentation 60分 + Discussion 30分 (目安)

料金: 500円 (税込)



お申し込みは QR コードまたは、
【アート化セミナー 2022】で検索

『福祉だからこそできること』

講師

原田啓之 (PICFA)

Hiroyuki HARADA

しごと

1

企業や行政、大学など他分野と協同したプロジェクトを展開する PICFA（ピクファ）。華やかにみえる活躍の根底には、PICFA が大事にする「福祉だからこそできることをやる」、「その場にいる人に軸を置く」という姿勢があります。このトークセミナーでは、PICFA が障害のある人と共にどのようにプロジェクトを進め、さまざまな分野の人や企業とつながりをつくっているのかお伺いしてみます。

presentation

PICFA（ピクファ）は、佐賀県で 350 年続く医療法人清明会きやま鹿毛医院内にある、障害福祉サービス事業所就労継続支援 B 型施設です。開所は 2017 年 7 月。施設名称「PICFA」は PICTURE（絵画）＋ WELFARE（福祉）を組み合わせたもの。年齢層の幅広い 15 名の利用者と、5 名のスタッフが通所しています。利用者と企業や教育機関、地域行政とのコラボレーションやタイアップも積極的に行なっており、2022 年にはローソンとのタイアップにより、全国の「MACHI café（マチカフェ）」のカップデザインに利用者の描いた絵が採用されています。

PICFA の「しごと」

就労継続支援 B 型施設の PICFA では利用者の表現創作活動を「しごと」として位置付け、工賃を支払われています。日々の活動においても、障がいのある人主導でしごとを進めることができること、“やりたいこと”や“おわり”を自己決定できることを大事にしていると原田さんは話します。いろいろな障害特性があるなかで、PICFA ではどのように利用者の尊厳を守り、かつ自信につなげていくための工夫をしているのでしょうか。このセミナーでは表現創作活動を「しごと」に変えていく上で必要な付加価値の付け方や考え方にまつわるヒントを探ります。



↑ 福岡市博多区の博多駅から徒歩5分のところにあるもつ鍋や「一藤」のビルに描かれた壁画。
高さ14.4m、横11.2mの四階建ての壁面に足場を組み、PICFAメンバーの本田の原画「ホシゾラ」を
五日間で完成させた。

discussion

「福祉だからこそできること」という視点が大事だと話す原田さん。では福祉だからできる、とはどういったことなのでしょう。例えば、単価や購買率を上げる上で有効な福祉と企業のコラボレーション制作。さまざまなコラボレーション事例をもつPICFAですが、「仕事の単価は設けていない」と原田さんは話します。大手企業から個人まで、コラボレーターのバリューやデザインの力だけに頼るのではなく、常にPICFAとの価値観のすり合わせをした上で、「しごと」に変換していく。後半は、ローソンとのコラボレーション最新事例にまつわるエピソードなどもお伺いしつつ、創作活動を「しごと」に変えていくために必要な付加価値についてさらに踏み込んでお伺いします。

review 「福祉だからこそできること」

いま、障害のある人を取り巻く状況のなかで、働く選択肢が少なく所得が低いという課題があります（添付の図より）。福祉施設や企業への就職などをとおして、一人ひとりの個性にマッチした仕事がまだ少ないのが現状です。近年さまざまな地域、分野においてより価値の高い仕事や、やりがいのある働き方などを模索する事例が増えてきましたが、個性をいかし、創造的な活動をとおして仕事をつくる事例はまだ少なく、アートを仕事にする、という事例はまだ限られています。今回ご紹介する PICFA の取り組みは、メディアで取り上げられることも多く、企業との連携やその規模の大きななどに注目が集まっています。そのなかで、表面的な結果（売り上げや外部の反響など）だけではなく、障害のある人自身の成長や支援者など周囲の人の関わりの深さなども含めて、あえて福祉の環境だからこそ実現できている仕事もあります。代表の原田さんの福祉感、仕事感を共有することで、障害福祉の分野であたらしい仕事を模索する意味をあらためて考える機会にしたいと思いました。

福祉事業所で就労する障害のある人の所得

施設種別	平均賃金・工賃		施設数	人数 (約)
	月額	時間額		
就労継続支援 A型事業所（雇用型）	79,625円	899円	3,757カ所	7万人
就労継続支援 B型事業所（非雇用型）	15,776円	222円	13,441カ所	25万人

※参考）厚生労働省 令和2年度工賃（賃金）の実績について

◆セミナーを終えて…聞き手＝岡部太郎 Taro OKABE （一般財団法人たんぼぼの家）

原田さんのお話を聞きながら、PICFAの創造性は、日々のルーティンの積み重ねの上に成り立っているということを実感しました。活動空間をきれいにすることや社会人としての常識を踏まえ行動すること。来客の対応など、基本的なことをスタッフは学びます。そして現状分析をして未来予測をすること。たとえばコロナ禍で、接触をとまなう仕事がなくなると予測し、作品をためていき SNS などで発信することに注力する。こういったことは情報収集と的確な判断と迅速な行動力が伴っていないとできないことですが、よく考えると基本的な会社組織で行われていることだとも言えます。逆にいうと「福祉だから利用者の都合が最優先だ」、とか、「アート活動をしているから雑然としていてもいいんだ」、といった言い訳をしていないか、私たちは問いかけられているのだと思いました。もちろん障害者福祉サービスとして、利用者優先ではありますが、ひとつひとつの言い訳が内向きになったときに、社会との接点はどんどん狭くなります。とはいいながら、PICFA が関わる仕事には、常にメンバーひとりひとりの物語があることも今回の気づきのひとつです。外部からの仕事の依頼に対し、受け身ではなく、与えられた条件のなかで、メンバーの可能性や成長をうまく寄り添わせるか。原田さんご自身はアートの専門性はないと言いますが、仕事の大小や内容にかかわらず、誰の幸福につながるのか、根本的な部分を大事にしながら活動することが成功につながっているのだと思いました。

『つなぐ人を育てる』

講 師＝武田 和恵

(やまがたアートサポートセンターら・ら・ら)

聞き手＝坂野 健一郎

(新潟アール・ブリュット・サポート・センター NASC)



しごと 「つなぐ人を育てる」

このセミナーのご視聴はこちら

Presentation 60分+ Discussion 30分(目安)

料金: 500円(税込)



お申し込みは QR コードまたは、
【アート化セミナー 2022】で検索

『つなぐ人を育てる』

講師

武田和恵（やまがたアートサポートセンターら・ら・ら）

Kazue TAKEDA

しごと



福祉施設がデザイナーやアーティストと協働する事例が増えています。あたらしいつながりを生み出す際に必要となってくるのは、異なる分野の人たちをつなぐコーディネーターの存在です。いま、コーディネーターには一体どのような役割が求められているのでしょうか。このトークセミナーでは東北を活動拠点とする坂野健一郎さんから、同じ東北を拠点に福祉とアートをつなぐ人武田和恵さんに話しをお伺いします。

聞き手：坂野健一郎（新潟アル・ブリュット・サポート・センター NASC センター長）

presentation

やまがたアートサポートセンターら・ら・らは、社会福祉法人愛泉会が運営する、障がいのある人の表現を発表するギャラリー「ぎやらりーら・ら・ら」を拠点に、2016年から山形県の事業、2020年から障害者芸術文化活動普及支援事業として、山形県内の障害のある人の芸術文化活動の普及支援に取り組んでいます。山形県内各地域の活動に寄り添い、福祉と芸術文化のかけ橋になるよう、両分野をつなぎ、さまざまな人材と連携しながら、障害のある人の芸術文化活動のさらなる充実を目的に活動しています。活動を通して、多様性の理解促進をはかり、新たな価値創造の発信を続け、互いを尊重し理解しあえる包容力のある地域社会創造を目指しています。

ら・ら・らの「しごと」

武田さんは、山形県山形市の福祉施設で長年勤務されたのち、たんぼぼの家やエイブル・アート・ジャパン東北事務局での勤務。現在は、山形市にあるやまがたアートサポートセンターら・ら・らにて、コーディネーターとして活動されています。障がいのある人の表現活動支援に携わるなかで言語や常識、専門性の異なる領域をつなぎ、中間支援やコーディネーターの重要性を体感されたと話す武田さん。さらに、東日本大震災後の宮城県南三陸町や山元町での表現活動を通じた支援体験も経て、地域交流や関係性づくりといったテーマにも多く取り組まれるようになります。このセミナーでは、近年の活動をご紹介いただきつつ、支援する、されるという立場を超えた、協働者としての福祉とアートのあり方や「しごと」のつながりについてお話しを伺います。



↑繊維産業が盛んな米沢市で、古くから作られてきた高密度の手織り絨毯織通(だんつう)の伝統工芸技術と、障害のある人の表現・技術交流から生まれたたんぼの家との協働プロジェクト。アートディレクションをデザイナーの吉田勝信さんが行い、武田さんはコーディネーターを担当した。

discussion

後半は、新潟県アール・ブリュットサポートセンターの坂野健一郎さんを交えディスカッションを行います。障害のある人を中心に、地域に点在するさまざまな表現活動の相談窓口や中間支援を行う坂野さん。一人ではできないけれど、やりたいことはたくさんある。こうした気持ちを抱える人も多いなかで、規模や分野を問わず、「つながり」にまつわる相談が絶えないと坂野さんは話されます。こうした現状多くのニーズを踏まえ武田さんは、組織の外、福祉という枠を越えて関係性を広げていくことが、結果的に自分の「しごと」につながったり広がっていくのではないかと話されます。「しごと」のつなぎ方また、つながを「しごと」にするとはどういうことなのでしょう。このセミナーを通して考えてみます。

review 「つなぐ人を育てる」

障害のある人たちの持続的な社会参加を考える時に必要なのは、地域で福祉と社会をつなげる役割です。厚生労働省が実施している「障害者芸術文化活動普及支援事業」は、全国 40 程ほどの中間支援団体（支援センター）が、各地の障害のある人たちのアート活動に関する相談支援や活動普及に取り組んでいます。各支援センター同士の連携も図りながら、作る場、伝える場、そしてつなぐ場をつくってきました。今回のテーマ、創造性をいかした仕事をつくるという時に、こういった中間支援組織にいる人たちがどんな活動をして、何を地域にもたらしめているのか、そして何が課題なのかを具体的に共有することで、専門分野を横断し、あたらしい価値や仕事をつくること、それらをつなぐ人たちを育てることが、地域での持続的な活動につながることを共有したいと思いました。福祉分野や産業振興の分野で仕事づくりの中間支援をしている人たちにもヒントになればと思います。

◆セミナーを終えて…

聞き手 ■ 坂野健一郎 Kenichiro SAKANO（新潟アール・ブリュット・サポート・センター）

『つなぐ人を育てる』。とても良いお題をいただきました。つなぐという言葉は、福祉の世界では良く使われます。多職種のネットワーク化が大事だとか、住民同士のつながりづくりが大事だとか、特に前の職場では嫌というほど聞いていました。そして嫌というほど聞いていたので嫌になりました笑。必要性だけが訴えられていてその先の行動にあまりつながっていないことと、何か困ったことがあればとりあえずネットワークを作っておけばいいんじゃない？みたいな話が多くて。「自分事から否応なしにつながざるを得なかったんです。やりたいことが多すぎて」。セミナー中の武田さんのこの言葉はとても本質的だと感じました。明確につなぎたい・つながなければいけない何かを見つけられるからこそつなげられる。熱量のある『つなぐ』を見つけられる人を探していきたいと思います。

『あそびとまなびを両立させる』

講 師＝滝沢達史

(ホハル代表／アーティスト)

聞き手＝内山尚子

(たんぽぽの家相談支援センター)

学び 「あそびとまなびを両立させる」

このセミナーのご視聴はこちら

Presentation 60分＋ Discussion 30分(目安)

料金：500円(税込)



お申し込みは QR コードまたは、
【アート化セミナー 2022】で検索

『あそびとまなびを両立させる』

語り手

滝沢達史（ホハル代表／アーティスト）

Tatsushi TAKIZAWA



障害のある人もない人も大人も子どもも関係なく、人と人がただ一緒にいられるような社会をつくることをめざす、放課後等デイサービス「ホハル」。ホハルでは、通ってくる子どもやはたらくスタッフが自分の意思で「進む」ということを大切にしています。このトークセミナーでは、ホハルに通う子どもたちの学びと遊びの両立の仕方や工夫、また、こうした活動が続けるための仕組みづくりについてお伺いします。

presentation

岡山県倉敷市内の真備地区と矢掛町の美川地区に拠点を構え、放課後等デイサービス事業を行う「ホハル」。設立は2018年。子どももスタッフも主体的に楽しめる場所、地域の誰もが集まれる場所になることを目指して開所しました。放課後等デイサービスとして、障害者手帳または、受給者証をもつ6歳から18歳までの子どもを対象に、放課後等の学校以外の時間に学習やあそびを通して子どもの社会性や生活力を高めるための支援を行うことを軸としつつも、ホハルでは、地域に開かれた場所として利用者以外の子どもにも施設を開放しています。

ホハルの「学び」

「障害は環境次第」と語る滝沢さん。ホハルではいわゆる学習支援も行いますが、読み書きや九九といった小学校3年生程度の基礎学力までであれば良いとの方針。その先の「学び」は、子どもの主体的な学習欲次第なのでは、とも話されます。こうした視点は「あそび」にも通底します。子どもたちはホハルでやりたいことがある場合、イベント計画書を作成し子ども会議で検討したのち、合意を得た上でやりたいことの実現をさせていくのだそう。活動紹介動画からもやりたいことを実現させた子どもたちの充実感が伝わります。さらには、大人が幸せであること、職員が楽しんで充実感を持っているかどうかも大切にするホハル。このセミナーでは、楽しみながら「学び」と「あそび」の両方の主体性を育むホハルの日常をご紹介します。



↑ホハルの日常。子どもたちの企画のなかには、釣り部や軽音部、祭り部やラップ部なども。

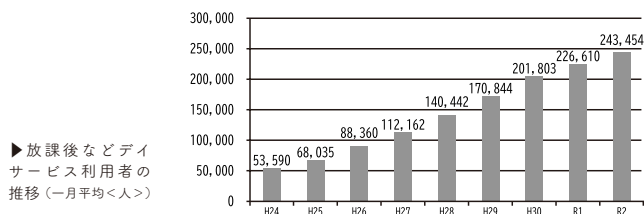
discussion

ホハルではスタッフが施設や子どもたちを管理するためのルールは設けずに、問題が起こった時にルールをつくるという方針で日々、運営をされています。あるとき、外からドローンをもって子どもたちの間で取り合いに。解決策が出るまで使用禁止にしてみんなでルールを考えた等々、ホハルの日常がうかがえるエピソードを伺いながら、後半はたんぽぽの家相談支援センターの内山尚子を交え、勉強や学力だけでなく、広義の意味での「学び」を支援しながらも「楽しむ力」を育む環境づくりについて考えます。

review 「あそびと学びを両立させる」

放課後等デイサービスについて、厚生労働省は「学校通学中の障害児に対して、放課後や夏休み等の長期休暇中において、生活能力向上のための訓練等を継続的に提供することにより、学校教育と相まって障害児の自立を促進するとともに、放課後等の居場所づくりを推進する事業」と位置付けています。

厚生労働省の資料（下記の図）をみても明らかのように、平成24年の児童福祉法改正以降、利用者数は右肩上がりが増えており、ニーズの高さがうかがえます。ここでいう「障害児」は、障害者手帳を所持している児童に限りません。発達障害がクローズアップされるようになって久しい現在、障害特性等により何らかの「生きづらさ」を抱えた児童にとって、放課後等デイサービスが大切な居場所として機能しているケースも多い一方、事業者数の増加に伴い、事業者間での質のばらつきが大きいことは課題の一つです。



◆セミナーを終えて…聞き手＝内山尚子 Naoko UCHIYAMA（たんぼ相談支援センター）

滝沢さんからお話いただいた「ホハル」の実践はとても刺激的で、映像を見ながら「ケガしそう！」とか「溺れそう！」とか、ハラハラするところもありました。それは真剣に遊んでいる証拠のようなもので、まさに「放課後」の正しい過ごし方だななんて思いながら話を聞かせていただきました。発達や成長の種はあそびの中にたくさんあって、信頼できるおとなに見守られながら、自然の中で思い切りあそぶことそのものが「療育」なんだと思います。

滝沢さんは、お話の中で「ホハル」について「地域の誰もが集まれる場所。地域の誰もが来ていい、利用者じゃなくても来ていい。」と言われていました。放課後等デイサービス事業所が全国的に増え続ける現状に、インクルーシブとは真逆の様相をみて複雑な心境を抱いていた私にとって、滝沢さんのこの言葉は心強く響きました。放課後等デイサービス事業所が、子どもを中心としたインクルーシブな地域をつくる拠点となる可能性はまだ残されているのかも知れません。これからの「ホハル」さんの実践に注目したいと思います。

『誰もが学び続けられる 環境をつくる』

講 師 = 佐竹真紀子

(美術作家／一般社団法人 NOOK)

講 師 = 伊藤光荣

(エイブル・アート・ジャパン東北事務局)

聞き手 = 森下静香

(GoodJob! センター香芝)

学び 「誰もが学び続けられる環境をつくる」

このセミナーのご視聴はこちら

Presentation 60分 + Discussion 30分 (目安)

料金: 500円 (税込)



お申し込みは QR コードまたは、
【アート化セミナー 2022】で検索

『誰もが学び続けられる環境をつくる』

講師

佐竹真紀子 Makiko SATAKE

(美術作家／一般社団法人 NOOK)

伊藤光栄 Kouei ITO

(エイブル・アート・ジャパン東北事務局)

学 び



障害のある人が学校を卒業したあとも学び続けることのできる「環境づくり」が注目されています。誰もが孤立せず、社会のなかで自身の興味を知ったり学びを深めたり、話せる仲間を必要としているのではないのでしょうか。このセミナーでは多様なワークショップや勉強会を企画運営している佐竹真紀子さん、伊藤光栄さんの2人のゲストをお招きし、生涯学習と表現活動、また文化芸術の関係性について話し合います。

聞き手：森下静香（GoodJob! センター香芝）

presentation

美術作家としての活動の傍ら、一般社団法人 NOOK（のおく）の理事としても活動をする佐竹真紀子さん。2015年に東北で美術活動を中心に行うメンバーらによって設立されたNOOKでは、社会におけるコミュニケーションの活性化促進を目的として、地域文化の調査、歴史的資料のデジタルライズなどの記録・保存、地域社会や公共団体と協働した制作活動を行っています。NOOKの活動に加え、佐竹さん個人としても、エイブル・アート・ジャパンが主宰する障害者芸術活動支援センター事業（通称：SOUP）にもファシリテーターやコーディネーターとして参加するなど、ネットワークを広めながら活動されています。

佐竹真紀子さんの「まなび」

佐竹さんがエイブル・アート・ジャパンが主宰する障害者芸術活動支援センター事業（通称：SOUP）にはじめて参加をされたのは2018年。以来、同団体が主宰する仙台市の文化施設を活用したアトリエ事業「アトリエつくるて」のファシリテーターとして市民参加者の表現活動を支援したり、障害者の生涯学習の機会と、障害をもった人が参加できる「まなびや」の拡大を目的とした活動「スウプノアカデミア」のコーディネーターとして企画・運営に携わります。美術家としての個人での活動から地域や社会とつながりながら「まなび」を広めていく上で大切にしていることや活動を通して見えてきた視点をご紹介します。

presentation

特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパンは関東と関西、東北の3つの活動拠点から、アートを通じてだれもが豊かに生きることのできる社会の実現を目指し、アートの可能性や人間の可能性を再発見する活動を行っています。活動拠点の一つ、東北事務局があるのは宮城県仙台市。東北事務局のメンバーと、地域で障害者の芸術活動支援を行う人たちが一緒になって生まれた活動チームが「SOUP（スープ）」です。スープでは、障害のある人が自由に表現ができ、また、芸術文化にアクセスできるよう、相談窓口の設置や関係者のネットワークづくり、障害のある人とつくる参加型展覧会の企画運営を行っています。

エイブル・アート・ジャパン東北事務局の「まなび」

東北ご出身の伊藤さんは特別支援学校の教員などを経て、2021年よりエイブル・アート・ジャパン東北事務局に参加。以来さまざまな活動に携わります。今回のセミナーでは、エイブル・アート・ジャパン東北事務局の多岐にわたる活動の中でも、障害のある人の生涯学習の機会と、障害のある人が参加できる”まなびや”の拡大を目的とした活動「スープノアカデミア」の取り組みについてご紹介いただきました。セミナーのなかでは、ワークショップや勉強会を通して、障害のある人が主体的に学べる手法を検証したり、こうした学習意欲を支援するための人材育成など、支援モデルの構築を目指すスープノアカデミアならではの「学び」の視点やプログラムを運営する上での工夫点などをお伺いします。

discussion

後半は、お二人が携わる「スープノアカデミア」の活動を通して見えてきた、気づきや学びについて詳しくお伺いします。スープノアカデミアでは文化芸術といったテーマにとどまらず、お金や防災、恋愛まで「暮らし」にまつわるさまざまなテーマを取り上げ、勉強会やワークショップを開催しています。これらのテーマは、企画段階から障害のある参加者と共にアイデア出しをしたり、具体的なプログラムの内容検討を経て決定されるそう。トーク終盤はエイブル・アート・ジャパンの柴崎由美子さんも加わり、コミュニティや学びの機会をより、多様な人たちにむけて拡げていくために必要な視点や「共に学ぶ」ということについて考えてみます。



↑せんだいメディアテークで開催したスウプノアカデミアのワークショップの1コマ。「おカネってなんだ！？しくみと経済のハナシ」というテーマで、参加者は自分の夢の設計図を考えてみた。



↑スウプノアカデミアでは、身近な日常の中からワークショップで取り上げたいテーマを参加者と話し合いながら決定する。写真は2021年の夏に開催したテーマ。



↑写真は、佐竹さんがファシリテーターとして参加した「アトリエつくるて」の活動の様子。



↑スウブノアカデミアワークショップの1コマ「恋愛演劇ワークショップ」の様子。演出家で俳優の都甲マリ子さんを講師に迎えて、疑似告白体験を通して人間関係について考えてみた。

review 「誰もが学び続けられる環境をつくる」

障害者の生涯を通じた学習活動の充実にむけた動きは、2014年の障害者権利条約の批准や2016年の障害者差別解消法の施行等もふまえ、学校卒業後の障害者が生涯を通じて学び続けられる社会、ともに学び、生きる共生社会の実現に向けた取り組みを推進することが急務であるという考えのもとで、国や自治体にそれを推進するための仕組みがつくられてきました。文科省の「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究」では、学校から社会への移行期や人生の各ステージにおける効果的な学習にかかる具体的な学習プログラムや持続可能な実施体制等に関する実証的な研究開発を行うため、全国教育委員会や大学、NPO、保護者会等においてさまざまな講座やコンテンツ開発等が行われ、文科省のウェブサイトでも紹介されています。現在、国や自治体発でこうした取り組みが行われるのは「学べる場が少ない」ということだけではなく、そもそも「学ぶことは何かというイメージ、また学ぶことで得られる豊かな人生のイメージをどう描くかが難しい」ということがあるのではないのでしょうか。どのように学び、楽しみ、他者と出会い、地域や社会への関心を高めていくことができるのか。生涯学習という言葉とともに、あらためてその学びの可能性が問われています。

◆セミナーを終えて…聞き手＝森下静香 Shizuka MORISHITA (GoodJob! センター香芝)

障害者芸術活動支援センター@宮城 (SOUP) の《スウプノアカデミア 2021》は、「[FUN]」「[LIFE]」をテーマの柱にプログラムが実施されてきました。その報告フォーラムで私がもっとも興味深かったのは、参加者のみなさんによるプレゼンテーションです。参加した当事者のみなさんが、パワーポイントやアニメーション、漫画などさまざまな方法を使って報告。恋愛のプログラムの報告もあれば、情報保障についての意見、アカデミアの校長を決める選挙など、いろいろなことを話し合い、学び合ってきたことが伝わってきました。このプレゼンをどのように行うか一緒に練習していくことも生涯学習らしいプロセスのように思います。参加する人たちの意識の高さ、自分たちで学ぶことを決めていくことの大切さが伝わってきました。地域の資源とどのように連携するかも生涯学習のポイントになります。それぞれの生活が豊かになったり、新しい関係がうまれていくこと、好きなことをみつけ身につけていくこと、生涯学習が生活にあることはあらためて誰にとっても大切なことであることを実感しました。注目したいと思います。

『自分たちの手でつくる 未来の運動会』

講 師＝西 翼

(運動会協会 理事、
山口情報芸術センター [YCAM] キュレーター)

聞き手＝小林大佑

(GoodJob! センター香芝)

コミュ 「自分たちの手でつくる未来の運動会」

このセミナーのご視聴はこちら

Presentation 60分＋ Discussion 30分(目安)

料金: 500円(税込)



お申し込みは QR コードまたは、
【アート化セミナー 2022】で検索

『自分たちの手でつくる未来の運動会』

講師

西翼（運動会協会 理事、山口情報芸術センター [YCAM] キュレーター）

Tsubasa NISHI



密集や接触を避けたい近年の社会状況は、運動会の開催においては完全な逆風です。これまで自分たちの手に入るもので運動会種目をつくってきた「未来の運動会」でもこうした状況を受け、オンラインによる運動会を実施しました。身体感覚やコミュニケーションのあり方はどのように変化しているのでしょうか。このセミナーでは、与えられた条件下で創造性を発揮する方法について話し合います。

聞き手：小林大祐 (GoodJob! センター香芝)

presentation

登壇者の西翼さんが理事の一人を務める運動会協会では、運動会の未来を考えてつくるプロジェクト「未来の運動会」を全国各地で開催し、さまざまな角度から注目を集めています。山口情報芸術センター（以降、YCAM）でキュレーターを務める西さんは、2015年にYCAMで開催した「未来の山口の運動会」を企画発案。以来、YCAMならではの手法やメディアテクノロジーを活用しつつ、あたらしいスポーツを生み出したり、スポーツのあたらしい楽しみ方を実践していく、ハッカソン形式のイベントを開催されています。

「未来の運動会」のコミュニケーション

未来の運動会は最新の道具を使うだけではなく、「未来に向かって自分で少しずつ変化させていこう」とする未来志向の運動会です。最大 200人近くが参加するこの運動会は、プレイ種目を開発する「運動会ハッカソン」と出来上がった種目を実装する「未来の運動会」の2つで構成され、参加者全員がつくって (Develop) 遊ぶ (Play)、デベロッパレイヤー (Deveroplayer) となって、「つくる・共有する・あそぶ (試す)」工程を繰り返しながら種目として精度を上げていきます。課題もソリューションも自分達で見つけていく、こうした消費者と生産者を分けないサイクルを大きくしていくと楽しい世の中になるのでは？と、話す西さん。あたらしいスポーツ種目をつくるだけではなく、アイデアを伝える形にするための「コミュニケーション」が未来の運動会の鍵を握ります。



↑ 2019年5月「第4回未来の山口の運動会」で実施された「芝で転がりレー」の様子。
2人1組で寝転がり、リレー形式で小さなボールを転がりながら運ぶ。いち早くゴールまでボールを運べたチームの勝利。

discussion

「運動会は小さな社会」と話す西さん。多様な立場の人たちと対話しながら共にルールや価値を創り上げています。最近では、外出自粛を受け「オンライン運動会」も未来の運動会の一環として行われています。参加者の創造性を活かし、主体的に参加をしてもらうためにはどのような視点やマネジメントが必要となってくるのでしょうか。また身体性を伴うイベントのオンライン開催に際し、未来の運動会ではどのようなアイデアが生まれ実装されたのでしょうか。後半は、GoodJob! センター香芝の小林大佑を交え、「運動会ハッカソン」の具体的な実施方法などもご紹介いただきながら、多様な人とともにイベントをつくり運営していく上で必要な配慮や視点について考えます。

review 「自分たちの手でつくる 未来の運動会」

ケアの現場に目を向けてみると、身体に直接触れることが大前提になっている行為の多さにあらためて驚きます。朝起きるとベッドからの移乗、トイレ介助に食事介助。椅子から立ち上がったリ腰かけるときにも身体のどこかに触れてサポートすることもあるでしょう。声が小さい人には聞き取れるように口元に顔を近づけなくてはいけないことだってあります。

しかし、誰かの身体に近づくとき、触れるときの緊張感は明らかにこれまでとは違ってしています。オンラインでの人との関わりはそうした緊張感からは解放される反面、どこか伝わらなさや不自由さを感じるときもあります。オンライン上で同じ時間を共有していても、どこまで自分の感覚や思いを共有できているのか、手ごたえを感じにくいのかかもしれません。このような状況で、私たちの身体感覚や、今回のテーマにもある運動会のようなひとつの出来事や体験の共有といったことが、どう変わっていくのか気になっていました。人が集まるところにはにぎわいがうまれます。オンラインでもそれは可能なのか、可能だとしたらどのように実現しているのか。新しい技術を自分たちの手で使いこなし、時には自分たちでつくってしながら、与えられた条件の中で創造的に課題をクリアしていくための未来志向の話を聞きました。

◆セミナーを終えて…聞き手＝小林大佑 *Daisuke KOBAYASHI* (GoodJob! センター香芝)

気晴し、健康、能力の向上、社会参加、自由な想像力の発揮など、スポーツをする理由はさまざまです。福祉施設や地域のなかで、余暇や交流や運動の一環として行うこともあります。コロナ禍によってあらゆるオンライン化が進む一方で、未来の運動会が示してくれているのは、ラジオ体操や種目を一緒に体験できるように「オンラインでも身体感覚や感情を共有できること」、そして「自分たちでスポーツはつくれること」だと思います。だとすれば「ソーシャルディスタンスをたもちながらも、身体感覚を共有でき、楽しめるスポーツはつくれる」のではないのでしょうか。対面はダメだから非対面となるだけでなく、その制約や制限すらも内包するような活動をつくる。これは病気や障害という制約や制限のある福祉の環境においても、創造的な活動を生み出すヒントになり得ると感じています。

『老いや障害を捉えなおして 共に楽しむ関係をつくる』

講 師 = 菅原直樹
(OiBokkeShi)

聞き手 = 佐藤拓道
(たんぽぽの家アートセンター HANA)

コミュ 「老いや障害を捉えなおして共に楽しむ関係をつくる」
このセミナーのご視聴はこちら

Presentation 60分 + Discussion 30分(目安)
料金: 500円(税込)



お申し込みは QR コードまたは、
【アート化セミナー 2022】で検索

『老いや障害を捉えなおして共に楽しむ関係をつくる』

講師

菅原直樹 (OiBokkeShi)

Naoki SUGAWARA



認知症の人の見ている世界を演劇体験として観客と共有する OiBokkeShi (オイボッケシ)。老いにとまなう一見ネガティブに思えることも、視点をかえれば感じ方が変わってくるのではないのでしょうか。このセミナーでは、菅原直樹さんとたんぽぽの家の佐藤拓道、演劇創作活動に取り組む2人から演劇を通してひろく活動を発信、発表していくことの意義や心がけていることなどを伺います。

聞き手：佐藤拓道（たんぽぽの家アートセンター HANA）

presentation

地域に「老い」「ボケ」「死」の明るい未来をあぶり出すをモットーに俳優で介護福祉士の菅原直樹さんを中心に、2014年に岡山県和気町にて設立した活動体「OiBokkeShi (オイボッケシ)」。高齢者や介護者と共に作る演劇公演や認知症ケアに演劇的手法を取り入れたワークショップを各地で実施しています。超高齢社会が抱える課題を「演劇」というユニークな切り口でアプローチする OiBokkeShi の活動は、ドキュメンタリー番組が日本民間放送連盟賞で優秀賞を受賞するほか、2021年には日英共同制作による上演が行われるなど、演劇や介護のジャンルを越え多方面、国内外からも注目を集めています。

OiBokkeShi の「コミュニケーション」

東京で舞台俳優をしていた菅原さん。特別養護老人ホームでの勤務経験をきっかけに介護と演劇の相性の良さに手応えを感じ、OiBokkeShi としての活動をスタートされました。看板俳優は認知症の妻を在宅で介護する岡田忠雄さん（95歳）。初上演作品『よみちにひはくれない』（2015）では、観客が俳優とともに街を歩きながら演劇を鑑賞する“徘徊演劇”という上演スタイルも話題を呼びます。演技なのか素なのかかわからない、虚実混じる世界観の根底には、「老人介護の現場に演劇の知恵を、演劇の現場に老人介護の深みを」という経験に基づく活動理念がありました。演劇プログラム制作の現場でどのようなやりとりやコミュニケーションが生まれているのか、菅原さんが演出にこめる視点と共にご紹介いただきます。



↑「老いと演劇」OiBokkeShi第3回公演「BPSD:ぼくのパパはサムライだから」(2016)上演の様子。
岡田さん90歳のときの作品。

discussion

セミナー後半はたんぽぽの家 HANA PLAY にて演劇プログラムの構成演出を担当する佐藤拓道を交え、質疑応答ディスカッションを行います。HANA PLAY では、プログラムに参加する障害をもったメンバーの実体験に基づくエピソードをつないで演劇創作が行われます。OiBokkeShi の菅原さんは「お年寄りほどいい役者はいない」とも、「介護者は役者になった方がいい」とも話されます。「老い」と「障害」それぞれ異なるテーマは異なれど共通点の多い2人。日々のケアを通して、時間を共にしてきたからこそ見えた視点や課題について語ります。

review 「老いや障害を捉えなおして共に楽しむ関係をつくる」

障害のある人との表現活動において、演劇やダンスといったパフォーマンスに取り組みときには、絵画のようなビジュアルアーツとはまた違った壁を感じる事が少なくないようです。外部から講師を呼ぶお金がない、振り付けや台本を覚えるのが難しい、活動するスペースがない、施設のスタッフが担当できるのか……など。たしかに、できない理由は次々と思いつかれますが、そもそもイメージしている演劇やダンスとはいったいどのようなものでしょうか。

OiBokkeShiを主宰する菅原直樹さんは、「老人介護の現場に演劇の知恵を、演劇の現場に老人介護の深みを」と語っています。この「演劇の知恵」を、菅原さんからお聞きし、高齢者の介護に関わる人だけでなく、福祉の現場ではたらく人をはじめ多くの人と共有したいと考えました。障害や老いに限らず、一般的には好意的に捉えられることの少ないような状況も、この「演劇の知恵」を持ってすれば、ありのままの状況や未来を肯定することにつながるのではないかという期待がありました。OiBokkeShiの演劇の題材はいつも、認知症の人のふとした話やふるまいからうまれています。だからこそ、「認知症」といったカテゴリーではなく、ひとりひとりの存在が立ち上がってくる。聞き手には、たんぼの家で障害のあるメンバーと日常を共にしながら、演劇創作にとりくむ佐藤さんを迎えました。菅原さん、佐藤さんからケアの現場に潜む演劇の種を聞いて、「演劇、やってみようかな」「これも演劇になるのかも」といった日常を見る視点の幅をちょっと広げるようなことが起きればと考えました。

◆セミナーを終えて…

聞き手＝佐藤拓道 *Hiromichi SATO* (たんぼの家アートセンター HANA)

一見、マイナスに思える「老い、ボケ、死」は、誰もが人生で直面する大切なことでもあります。それを演劇を通じて向き合うことで、前向きに捉えることができる。そして介護にはクリエイティブな側面があるという菅原さんのお話はとても興味深かったです。かつて社会で多くの役割を担ってきた高齢者の皆さんの物語に耳を傾け、その行為や行動を肯定からはじめることで、心地よい関係を生むことができます。このことは、日々時間に追われてケアをする者として、はたと気付かされる話でもありました。そして、“おかじい”こと劇団の看板役者、岡田さんとの演劇創作のお話。認知症を題材とし、商店街で上演された徘徊演劇では、観客と演者の境界を曖昧にし、偶然居合わせた人も観客として混じっている、自分の抱えていることも思わず相談するような場が生まれてきたそうです。演劇によって生まれる人や社会とのつながりに“なるほど”と思わされることばかりでした。

福祉をかえる「アート化」セミナーの これまで

「福祉をかえる『アート化』セミナー」の20年：森下静香

2002年にスタートした「福祉施設における『アート化』セミナー」。2008年に「福祉をかえる『アート化』セミナー」と名前を変え、今年のはじめてのオンライン開催も含め、これまで奈良で16回実施してきました。

第1回の開催は、1980年に建設したたんぼの家を2004年にアートセンターHANAとしてリニューアルオープンさせるための準備をしていたときです。「アート化」という言葉にアート作品をつくるということだけではなく、福祉施設や制度のなかに自由にやわらかいもう一つの視点を持ち込んでいこうという思いをこめ、それをより多くの人と共有し学び合う機会をつくることをめざしました。

この20年の間に福祉制度は大きく変化し、サービスの担い手も多様化しています。また、生活困窮や生きづらさなどさまざまな社会課題が顕在化するなかで、障害福祉に携わる私たちも障害は個人に帰属するのではなく、環境や社会との関係によって生じるということをより実感するようになりました。「アート化」セミナーもこうした社会や意識の変化を受け、常に変化してきました。

「アート化」の意味と具体的な実践を学ぶ

第1回のセミナーでは京都のみずのき寮や鹿児島しょうぶ学園、神奈川の工房絵（かい）など、日本の福祉施設のなかでも先進的な活動を行うリーダーたちにきてもらいました。福祉に対する理念、メッセージは参加者の心に強く響き、このセミナーをやる意義を私たち自身も実感しました。また、初期にはたんぼの家のスタッフも講師となり、「アート化する仕組み」「展覧会の開き方」「作品の額装や展示」「創作環境の整備」「高齢化とアート」などのプログラムを担当しました。これは成功例だけではなく、私たちの試行錯誤や失敗、そのなかからうまれた工夫などを公開することで参加者にとってアートに取り組むことがより身近なものになると考えたからです。ほかにも、当初から大事にしていたことに、当事者主体、人権の視点があります。第1回にたんぼの家のに通うメンバーの一人が自分のことばで「わたしにとってのアート」を語ったこと、第2回から著作権についてのプログラムがあったのは、「表現することは一人ひとりの権利である」ということをセミナーの根底においていたからです。

施設から地域社会とのかかわりへ

その後も「この人の話をききたい」「今、この福祉施設がおもしろい」などをスタッフで話しながら、アートスペースを運営する実践者やアートプロジェクトの研究者等を講師として招いてきました。2006年の障害者自立支援法の施行により「工賃倍増計画」という言葉が現場に浸透しはじめたときには、「商品化」や「アートと工賃アップ」など、障害のある人の所得をあげていくための具体的な方法を学ぶプログラムも実施。また、2008年にセミナーのタイトルを「福祉をかえる『アート化』セミナー」に変えたのは、福祉をとりまく状況の変化を受けての私たちからの提案でした。措置から契約へ、施設からコミュニティへと福祉の概念も大きく変化し、参加者も社会福祉法人からだけ

はなく、NPO 法人や株式会社、デザイナーなど、より多様な立場の人たちへと広がりました。地域や企業との連携、ビジネスモデルの模索、マネジメントの重要性、アートとソーシャルインクルージョン、デザインの力など、制度や従来の方法にとらわれずに、福祉のビジョン自体を広げるような議論も行うようになりました。

各地への広がりネットワークづくり

2010 年以降、障害のある人のアートを通じた地域参加や仕事づくりへの関心の高まりから、各地の自治体等と協働しセミナーを実施するようになりました。東日本大震災後の 2013 年には「Good Job! 東北プロジェクト」の一環として、岩手県、宮城県、福島県でも開催。東北では震災以降、小さくてもいきいきとしたアート活動の実践例がうまれており、NPO 法人エイブル・アート・ジャパンとともに、それぞれの地域でアート活動に取り組み始めた NPO や福祉施設を訪問し、一緒に企画を考え、開催にいたしました。各地でセミナーを行う際に大事にしたのは、中間支援に徹することです。私たちがそれぞれの地域でずっと取り組んでいくことができるわけではない、だからこそ、その地域で「アート化」のネットワークの中心となる団体や人を支援することに注力しました。

20 年を振り返って感じるのは、やはりこのセミナーの主役や原動力は参加者であり、参加者が日頃感じている現場をよりよいものにしていきたいという思いがセミナーで出会い、生まれるダイナミズムです。たんぼぼの家のスタッフにとっても全国からくる参加者のみなさんをどうやってホスピタリティをもって迎えようかと考える、1 年の中でもっとも気合いの入る研修の機会でもありました。徹底的にアートセンターをきれいにし、展示を行う。メンバーがアートセンターや福祉ホームを紹介する見学ツアーを行うために準備を重ねる。交流会で参加者同士が一人でも多くの人と知り合いになれるよう、新人スタッフが企画を考えるなども工夫の一つでしたが、ステージでの企画が進行していても参加者はそれぞれの名刺交換を行うなど、それぞれがにぎやかに情報を交換するものこのセミナーらしい時間でした。アートセンター HANA ギャラリーでも毎回、セミナー内容にあわせて、講師にかかわるアートの作品や商品を紹介する企画を行いました。参加者が熱心に資料として商品や書籍等を選んだり、この機会に遠方から作品を出展しているアーティストが講師と一緒に奈良ツアーを行い訪問し参加者と出会うなど、プログラム以外の時間も大切な交流の機会となっていました。

2022 年のコロナ禍でのオンラインセミナーは私たちの予想以上に多くの人が参加・視聴し、オンラインだからこその機会にもなりました。一方、熱い議論やとりとめもない悩みや課題も交換する、小さくても大切なお互いの活動を磨き上げていけるような場や時間を共有する対面の機会も求められていることも感じています。次は対面でもできることも願いながら一人ひとりの熱意や考えを交換しあい、化学反応をおこすことができるような機会、そんなインキュベーションの場としてのセミナーを今後も提案していきたいと思います。

* NPO 法人エイブル・アート・ジャパンの代表理事で元たんぼぼの家のスタッフの柴崎由美子さんと、たんぼぼの家の中島香織と森下静香の振り返りをもとに森下が編集、執筆しました。

活動年表 2002-2022

「福祉をかえる『アート化』セミナー」（2002年～2008年は「福祉施設における『アート化』セミナー」）は、地域や時代のニーズに応じながら、奈良県や国内各地で行ってきました。これまで、一般財団法人たんばぼの家が主催し（2012年からは社会福祉法人わたぼうしの会との共同主催）、エイブル・アート・ジャパンやNPO法人まる等、多くの方のご協力のもと、開催を続けてきました。関わっていただいた皆様に心よりお礼申し上げます。

*情報は開催当時のものです。また、一部、法人名など記載を省略している箇所があります。

■奈良県■

第1回

2002年6月

テーマ：こんなアートスペースがあったらいいな

講演 | 「福祉施設がアート化に取り組む意味」沼津雅子（みずのき／京都）、「工房しょうぶがめざすもの」福森伸（工房しょうぶ・菖蒲学園／鹿児島）、「アートと社会の新しい関係」播磨靖夫（たんばぼの家／奈良）
レクチャー | 「アーティストの権利・著作権を考える」太田好泰（エイブル・アート・ジャパン／東京）、「創作活動を支えるマンパワー」清水啓一（陶芸家／大阪）、南明容（Group文字屋／奈良）、「わたしにとってのアート」藤村時代（たんばぼの家メンバー／奈良）、中井幸子（たんばぼの家スタッフ／奈良）、「福祉施設をアート化する仕組み」「作品を保存し記録する」柴崎由美子（たんばぼの家／奈良）「それぞれの道具と画材」高澤俊郎（あぶくま養護学校）「展覧会の開きかた」森下静香（たんばぼの家／奈良）「アートマネジメント 商品化と市場化」那加野弘範（工房しょうぶ／鹿児島）
シンポジウム | 「これからのアートスペースのあり方を探る」関根幹司（工房絵／埼玉）、三井信義（いわて・きららアート協会、ルンビニー苑／岩手県）、高橋夏樹（アートステーションどんこや／宮崎）

第2回

2003年3月

講演 | 「21世紀のアートの新しい役割」播磨靖夫（たんばぼの家／奈良）、「福祉施設が『アート化』に取り組む意味」関根幹司（工房絵／埼玉）、「アートリンクがもたらしたもの」グレース・アルフレオ、ダニエル・ロッテンバーク（共にNPOクリエイティブ・クレイ）、サラ・スミス（アートリンク・プログラム参加アーティスト）、ほか
シンポジウム | 「こんなアートスペースがあったらいいな」山下完和（やまなみ工房／滋賀）、宮本恵美（川口太陽の家／埼玉）、梶原紀子（もうひとつの美術館／栃木）
レクチャー | 「記録としての写真の撮り方」原田文裕（日本写真映像専門学校／大阪）、「創作環境を整備する」岡田英志（ヒューマンユニバーサルデザインオフィス／大阪）、「工房まるの取り組み」吉田修一（工房まる／福岡）、「アトリエ素心居の取り組み」河部樹誠（アトリエ素心居／愛媛）、「身体表現の可能性」佐々恭子（表現塾／福岡）、「作品のゆくえ～商品化と市場化～」中谷徳宏（工房絵／埼玉）「魅力あるパブリシティ（広告）」岡部太郎（多摩美術大学／東京）、北田鶴士（たんばぼの家／奈良）「作品の額装と展示」清水啓一・森本義秀（たんばぼの家／奈良）
見学 | 「たんばぼの家ってどんなところ？」増子大介・中西正繁（たんばぼの家／奈良）

第3回

2004年9月

講演 | 「変化するアート～ともに生きる社会をデザインする」藤原恵洋（九州大学大学院芸術工学研究院／福岡）
報告 | 「海外のアートスペース～そのスタジオ運営の実際」柴崎由美子（たんばぼの家／奈良）
問題提起 | 「福祉施設の抱える課題と解決に向けての提案」関孝之（風の工房／長野）
分科会 | 「ワークショップから学ぶ」関口怜子（ハート&アート空間ピーアイ／宮城）
リレートーク | 「こんなアートスペースがあったらいいな」坂田雅亜子（神戸市小規模作業所たんばぼ）

／兵庫)、吉田修一(工房まる／福岡)、西村隆彦(デザイナー)、「多様化と表現 A～D」藤井克英・乾
章子・徳田奈穂子・中井幸子・山田万希生・三輪亮一・岡部太郎・嶺倉 崇・内山尚子・高鍋篤子(たん
ぽぽの家／奈良)、ほか

第4回

2006年1月

対談 | 「生きることを助けるアートの役割」サイモン順子(アートカウンセラー・アトリエポレポレ／
東京)、聞き手: 播磨靖夫(たんぽぽの家／奈良)
リレートーク | 「福祉が変わる・アートが変わる」戸枝陽基(むそう・ふわり／愛知)、新堂泰江(かれ
ん／神奈川)、前田厚子(染工房 NOBBY／兵庫)
アートマネジメント講座 | 田野智子(ハート・アート・おかやま／岡山)、播磨靖夫(たんぽぽの家／奈良)
選択プログラム | 「福祉施設を魅力あるものにする」西村隆彦(デザイナー)、「グッズをつくってみよ
う—企画・制作・発注・販売」永富恭子(フェリシモ／兵庫)、「自分たちの店を開く」板倉信太郎(l-style
／京都)、「高齢化と生活のアート化」沼津雅子(みずのき／京都)、小林説美・高鍋篤子(福祉ホームコッ
トンハウス)、「地域の中のアートセンター」岡部太郎(たんぽぽの家／奈良)、柴崎由美子(たんぽぽの
家／奈良)、「自然を通して障害のある人の感性を育む」山田万希生(たんぽぽの家／奈良)、森下静香(たん
ぽぽの家／奈良)、「生活を楽しむ技術」山本善徳(デイサービスふるーむ／奈良)、「障害のある子ども
と遊びの実践!」三輪亮一(たんぽぽの家／奈良)、日比野浩志

第5回

2008年11月

講演 | 「アートと社会の新しい関係」大谷 稜(DANCE BOX／兵庫)
実践報告 | 「施設のアート化 各地の実践から学ぶ」上田祐嗣(アートセンター画楽／高知)、新川修平
(片山工房／兵庫)、樋口龍二(まる／福岡)、山下完和(やまなみ工房／滋賀)
選択プログラム | 「商品開発と流通」板垣ユカリ(高島屋／大阪)、島 麻絵(コミュニティショップ
CHIRORI／奈良)、「企業との連携」法橋 聡(近畿労働金庫 地域共生推進室 室長／大阪)、岡部太郎(たん
ぽぽの家／奈良)、「生活支援とアート」宮脇聡子(たんぽぽ生活支援センター／奈良)、長澤由香里・
岩橋美穂(福祉ホーム コットンハウス／奈良)、「発達障害とアート」中井幸子・森下静香(たんぽぽの
家／奈良)

第6回

2009年10月

テーマ: プロダクトアウトからマーケットインへ
講演 | 「〈福祉〉はどこまで変われるか」佐々木喜美代(福岡市広報課／福岡)
実践報告 | 「〈福祉〉を超える・各地の実践から学ぶ」白岩高子(アトリエ・コーナス／大阪)、
吉野智和(l-style／京都)、夏目浩次(ラ・バルカグループ／愛知)
選択プログラム | 「デザインの力」立川裕大(t.c.k.w.／東京)、「アートの力」柳田烈伸(工房まるアー
ティスト／福岡)、樋口龍二(工房まる／福岡)、「アートをまもるスキル／著作権と契約」太田好泰(エ
イブル・アート・ジャパン／東京)「アートと生活支援」高鍋篤子、西村真理子、松本綾・宮脇聡子(たん
ぽぽの家／奈良)

第7回

2011年1月

テーマ: アートの力とデザインの力
基調講演 | 「デザインの力」奥村昭夫(デザイナー／京都)
実践報告 | 上野 拳(株式会社伊勢丹／東京)、福森 伸(しょうぶ学園／鹿児島)
選択プログラム | 「芸術と食による地域コミュニティの再生」田野智子(ハートアートおかやま／岡山)、

「情報をデザインする」中島厚秀・松本恭輔（宝塚メディア図書館／兵庫）、「施設の雑貨の魅力を引き出す」山口里佳（エイブル・アート・ジャパン／東京）、伊原亜希子（トライトーン／東京）、「ねこの約束 ヒット商品に隠された面白戦略」北川雄史（第二いぶき／岐阜）、ほか

第8回

2012年1月

テーマ：障害者アートとソーシャルビジネス

講演 | 「社会にとって必要な仕事をつくる」川添高志（ケアプロ／大阪）、「障害のある人のアートと幸福追求権」播磨靖夫（たんぼの家／奈良）、「ソーシャルビジネスとは何か」石川敬之（奈良県立大学／奈良）

選択プログラム | 「アートスペースに必要なものは何か」池永健介（工房まる／福岡）、「コミュニケーションをつくる商品のディスプレイ」加藤未礼（コミュニケーションデザイナー、おおきな木／東京）、「商品化を通して表現を社会に伝える」村谷つかさ（葦の家福祉会／福岡）、「メディアの力」藤野幸子（雑誌「ariya」発行編集人／福岡）、「販売戦略とメディア」村上智則（日本財団公益ボランティア支援グループ福祉チーム／東京）、「商品の流通と管理」笠原慎一（ねば塾／長野）「多様な表現をアウトプットする展覧会」武捨和貴（風の工房／長野）、ほか

第9回

2013年1月

テーマ：はたらきかたをデザインする！

講演 | 「社会をかえるものづくり」川野正彦（スタイルジャパン研究所／奈良）、「はたらくこと・あそぶこと・いきること」木ノ戸昌幸（スウィング／奈良）

選択プログラム | 「創造的なアートスペースをつくる」中川直美（アトリエハビパール／大阪）、「魅力を伝えるブランディング」鬼塚淳子・田中万里（たいせつプロダクト／福岡）、「楽しく働き、楽しく暮らそう～理念を伝える商品プロデュース」本多佳美（あおぞらボコレーション／新潟）、「暮部達夫（クレコス／奈良）、「多様な表現をアウトプットする展覧会」高橋法子（アトリエコーナス／大阪）、「商品づくりと販売へつなげる力」井上 愛（ひょうたんカフェ／愛知）、「ものづくりと売る力」里見喜久夫（はたらくよろこびデザイン室コトノネ／東京）、「企業発！ CSRの新しいかたち」森 豊（西山ケミックス／京都）、一坂正和（ソフィア／大阪）、ほか

ディスカッション | 「これからの仕事をデザインする」樋口龍二（まる／福岡）、柊 伸江（ダブディビ・デザイン）

第10回

2014年2月

テーマ：アートはクエスチョン・デザインはソリューション

講演 | 「アートの役割とまなざしのデザイン」花村周寛（ランドスケープデザイナー／大阪）、「今デザインにできること」迫 一成（ヒッコリースリートラベラーズ／新潟）

選択プログラム | 「創造的なアートスペースをつくる」日垣雄一・小野沙耶花（YELLOW／大阪）、「可能性を引き出す～障害のある人・スタッフの成長」山下完和（やまなみ工房／滋賀）「画材と表現」ターナー色彩株式会社、「生活とアートを近づけるアートプロジェクトとマネジメント」山口未樹（ポバイ／愛知）、「多様な表現をアウトプットする」宮下忠也（アートディレクター／大阪）、沼田里衣（神戸大学大学院国際文化科学研究科異文化研究交流センター協力研究員、音遊びの会代表／兵庫）、「アート活動をどう仕事につなげるか」原田啓之（JOY倶楽部／福岡）、高野賢二（クラフト工房 La Mano／東京）、「アート×デザインによるソーシャルビジネス」城島 薫（Tsunagu family／長崎）、藤井克英・中谷由美子（たんぼの家／奈良）

オプション | 「ダンスワークショップ研究会 アリとコスモス」佐久間 新（ダンサー／大阪）、渡邊弥生（たんぼの家／奈良）、ほか

第11回

2015 年 2 月

テーマ：メディエーション アートが起こす化学反応

講演 | 「アートプロジェクトから共生社会へ」 谷口文保（神戸芸術工科大学クラフト・美術学科／兵庫）、志水哲也（えびす／兵庫）「ダンスから生まれる生活と関係性」 牛山眞貴子（愛媛大学教育学部／愛媛）
選択プログラム | 「障害のある子どもの成長とアート活動」 卜部奈穂子（ベングアート／北海道）、「デザイナーの役割と可能性」 白鳥裕之・小山裕介（torinoko／東京）、金武啓子（西淡路希望の家／大阪）、近藤 聡（明後日デザイン制作所／兵庫）、原田祐馬（UMA/design farm／大阪）、「福祉施設発、これからの働き方・生き方と地域の発展」 風間康寛（エシカファーム／静岡）、小松浩二（REFS／静岡）、富永美保（JDF 被災地障がい者支援センターふくしま／福島）、「アートを通して開かれた魅力的な福祉をつくる」 中野厚志（ぬかつくるとこ／岡山）、奥野亮平・奥野麻美（ボングリ図画耕作所／和歌山）、「障害のある人の技術をいかす工程をデザインする」 浅野 翔（デザインリサーチャー／愛知）、藪内 都（poRiff／大阪）、「行政、企業、NPO の連携による仕組みづくり」 黒松祐紀（チャンネルエンターテインメントワークス／福岡）、藤井雅子（はあと・フレンズ・ストア／京都）、坂巻譲理（京都市保健福祉局障害保健福祉推進室／京都）、ほか
オプション | 「こたつラジラ ひねって、またいで、音楽で！」

第 12 回

2016 年 2 月

テーマ：芸術と社会包摂～幸せで美しく生きる

講演 | 「アートを地域の OS に」 山出淳也（BEPPU PROJECT、アーティスト／大分）「自己表現から表現者へ」 森田かずよ（女優、ダンサー／大阪）、石井悠輝雄（工房まるアーティスト／福岡）、山野将志（たんばぼの家アートセンター HANA アーティスト／奈良）
選択プログラム | 「ニッポンとフィンランド、障害とアート・デザインの現場から」 浅野翔（デザインリサーチャー／愛知）、太田清美（蟲 36／愛知）「多様なはたらき方、過ごし方を提案する建築 Good Job! センターの設計から」 大西麻貴＋百田有希（o+h/ 建築家／東京）
「アーティストが生まれる場所」 水野浩世（ユウの家／大阪）、岡崎 潤（デザイナー、造形教室主宰／大阪）、「夢をかたちにするマネジメント」 久保田 翠（クリエイティブサポートレッツ／愛知）、「施設長と考える仕組みや地域への発信」 吉田修一（まる／福岡）、木ノ戸昌幸（スウィング／京都）、成田 修（たんばぼの家／奈良）、「教育の現場から生まれる新しい価値」 西尾美也（美術家、奈良県立大学／奈良）、家成俊勝（建築家・ドットアーキテクト／大阪）、「ソーシャルチェンジをうながす公共文化施設」 鈴木京子（国際障害者交流センタービッグ・アイ／大阪）、乾 聡一郎（奈良県立図書館情報館／奈良）「現場スタッフと考えるアートを生み出す環境、役割」 金武啓子（西淡路希望の家／大阪）、宮下忠也（アートディレクター／大阪）、吉永朋希（たんばぼの家アートセンター HANA／奈良）

第 13 回

2017 年 7 月

テーマ：生きたアートの探求

講演 | 「イノチとインセキ」 高橋 悟（美術家、京都市立芸術大学／京都）、「表現未満、から見えるもの」 久保田 翠（クリエイティブサポートレッツ／愛知）、「アートとの出会いが育む創造性」 小島 剛（タチヨナ／大阪）、「存在と生活のアート」 宮下忠也（アートディレクター／大阪）ほか
選択プログラム | 「アートを支える道具」 納富太郎（W・I・N・G 一路をはこぶ／大阪）、鈴木 温・藏元徹平（たんばぼの家／奈良）「ワークショップのつくり方」 ホシノマサハル（こどもアートスタジオ／静岡）、「してはいけないアートマネジメント基礎編」 大澤辰男（アトリエライブハウス／大阪）、「舞台表現におけるケアのあり方」 森山淳子・宮本 聡（ニコちゃんの会／福岡）「地域とつながるサードプレイス」 新澤克憲（ハーモニー／東京）、鈴木励滋（カブカブ／神奈川）、「してはいけないアートマネジメント応用編」 宮下忠也（アートディレクター／大阪）、「アートと評価について考えるワークショップ」 谷 美奈（帝塚山大学／奈良）

第14回

2018年7月

テーマ：POP NOW—生活のなかの小芸術

講演 | 「共感をつなぐデザイン」 福島 治（デザイナー／東京）、「表現を生み出す愉快的な関係」 関根幹司（studio COOCA／神奈川）

選択プログラム | 「豊かな生き方・環境のあり方」 奥村奈央子（デザイナー／東京）、山根大樹（おりもんや／鳥取）「日々の出来事を発信する」 佐藤啓太・山森達也（クリエイティブサポートレッツ／静岡）、多田智美（MUESUM／大阪）「誰がアウトサイドを決めるのか？」 榊野展正（アウトサイダー・キュレーター、クシノテラス／広島）「生活と共にある創作活動」 原田啓之（PICFA／佐賀）「人が育つ現場の魅力」 岩崎江里子（サンフェイス／大阪）、岩田貞昭（南山城学園／京都）「境界をゆさぶる舞台表現」 長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院／福岡）、佐藤拓道（たんぼぼの家／奈良）

第15回

2019年7月

テーマ：芸術か非芸術か—分断を乗り越えて

講演 | 「人間の芸と自然の理」 熊倉敬聡（元慶應義塾大学理工学部、元京都造形芸術大学芸術学部／京都）、「見えないものを見る—障害のある人の表現がつなぐ人と人」 李 萬鏗（サンドウィッチェズスタジオ／台湾）、「こんな公民館、あり？ 地域の可能性を広げる公共施設の底力」 宮城 潤（那覇市若狭公民館／沖縄）、「『強くなるために弱くなる』 芸術運動」 播磨靖夫（たんぼぼの家／奈良）

選択プログラム | 「地域で場を開く—つくること、発信すること」 大政 愛（はじまりの美術館／福島）、大山真司（Lanka／鹿児島）「高齢化・重度化する障害とアート」 小和田直幸（工房集／埼玉）、吉永朋希（たんぼぼの家／奈良）「障害のある子どもたちの発達と教育」 風間康寛（エシカファーム／静岡）、高橋 智（EPO／静岡）「IoT と Fab と福祉—新しい技術を仕事と暮らしにいかす」 富本浩一郎（山口大学／山口）、藤井克英・小林大祐（Good Job! センター香芝／奈良）「知的財産権について知ろう！」 橋本高志（ぶろぼの／奈良）、森下静香・後安美紀（たんぼぼの家／奈良）、「アーティスト、私の仕事です。」 檜皮一彦（現代美術作家／大阪）、栗田淳一・早川弘志（やまなみ工房／滋賀）、ほか

第16回

2022年2月、3月

テーマ：しごと・まなび・コミュニケーション

「福祉だからこそできること」 原田啓之（PICFA／佐賀）「あそびとまなびを両立させる」 滝沢達史（アーティスト、ホハル／岡山）「つなぐ人を育てる」 武田和恵（やまがたアートサポートセンターら・ら・ら／山形）「誰もが学び続けられる環境をつくる」 佐竹真紀子（美術作家、NOOK／宮城）、伊藤光栄（エイブル・アート・ジャパン東北事務局／宮城）「自分たちの手でつくる未来の運動会」 西 翼（運動会協会、YCAME／山口）「老いや障害を捉えなおして共に楽しむ関係をつくる」 菅原直樹（OiBokkeShi／岡山）

■奈良県外■

埼玉

2010年12月 @埼玉県立近代美術館

登壇：山下完和（やまなみ工房／滋賀）、樋口龍二（工房まる／福岡）、上田祐嗣（アートセンター画楽／高知）、新堂泰江（かれん／神奈川）、梅田 耕（工房集／埼玉）、松田悠佳（たんぼぼの家／奈良）、太田好泰（エイブル・アート・ジャパン／東京）ほか

主催：埼玉県障害者アートフェスティバル実行委員会

新潟

2011年10月 @新潟市美術館

登壇：村谷つかさ（葦の家／福岡）、宮本恵美（工房集／埼玉）、山下完和（やまなみ工房／滋賀）、池永健介（工房まる／福岡）、伊原亜希子（デザイナー／東京）、長津結一郎（日本学術振興会特別研究員／東京）ほか

ほか

主催：新潟市

2012 年 10 月 @新潟市総合福祉会館

登壇：上田祐嗣（ファクトリー／高知）、樋口龍二（まる／福岡）、新川修平（片山工房／兵庫）、田口ひろみ（工房地球村／宮城）、市川萌・松田悠佳（たんぼの家 アートセンター HANA／奈良）、高野賢二（クラフト工房 LaMano／東京）、加藤美礼（おおきな木／東京）、ほか

主催：新潟市

2013 年 11 月 @万代市民会館

登壇：木ノ戸昌幸（スウィング／京都）、武捨和貴（リベルテ／長野）、小林あかね・中嶋梨沙（koro／新潟）、南 芳枝（アートかれん／神奈川）、緒方克也（明日への息吹／福岡）、中津川浩章（美術家、工房集／埼玉）、ほか

2014 年 10 月 @クロスパルにいがた

登壇：広島陽子（障害者総合支援センター／新潟）、角地智史（アートキャンプ Niigata／新潟）、小林あかね（福祉アートコーディネーター／新潟）、佐藤いづみ（ほおずきの会／東京）、浦 真由美（たんぼの家／奈良）、柴崎由美子（エイブル・アート・ジャパン／東京）、上島賢太郎（高島屋 MD 本部美術部／京都・大阪）、富永美保（JDF 被災地障がい者支援センターふくしま／福島）、初瀬尾久美子（第二いぶき／岐阜）

主催：新潟市

2016 年 1 月 @新潟県民会館

登壇：田野智子（ハートアートリンク／岡山）、山下完和（やまなみ工房／滋賀）、白岩高子（アトリエコーナス／大阪）、武田和恵（エイブル・アート・ジャパン東北事務局／宮城）、角地智史（アートキャンプ新潟／新潟）、柴崎由美子（エイブル・アート・ジャパン／東京）、小林あかね（企画制作室 Bridge／新潟）、ほか

主催：新潟市

福岡

2012 年 1 月 @ふくふくプラザ

登壇：福森 伸（しょうぶ学園／鹿児島）、北澤桃子（studioCOOCA／神奈川）、原田啓之（アトリエブラヴォ／福岡）、新川修平（片山工房／兵庫）、吉田修一（工房まる／福岡）、黒松裕紀（C.E.Works／福岡）松田悠佳（たんぼの家／奈良）、柴崎由美子（エイブルアート・カンパニー／奈良）、樋口龍二（工房まる／福岡）、伊原亜希子（デザイナー／東京）、古場 治（イムズマーケット／福岡）、太田好泰（エイブル・アート・ジャパン／東京）

主催：障がい者アートプロジェクト実行委員会（福岡市、NPO 法人まる）

協力：株式会社 C.E.Works、アリヤ出版

鳥取

2012 年 11 月 @鳥の劇場

登壇：山下完和（やまなみ工房／滋賀）、高野賢二（クラフト工房 LaMano／東京）、吉田修一（まる／福岡）、沼田里衣（音遊びの会／兵庫）、福角幸子（語り部／大阪）、福角宣弘（ダンサー／大阪）、白岩高子（アトリエコーナス／大阪）、柴崎由美子（エイブルアート・カンパニー／東京）、児玉夏希（わかやま N P O センター／和歌山）、中島諒人（鳥の劇場／鳥取）

主催：特定非営利活動法人鳥の劇場

共催：鳥取県 鳥取県障害者文化・芸術作品展等事業実行委員会

2015 年 1 月 @鳥取市文化センター

登壇：谷口文保（神戸芸術工科大学／兵庫）、田野智子（ハート・アート・おかやま／岡山）、川本尚美・榎 宣雅（片山工房／兵庫）、日垣雄一（YELLOW／大阪）、うのはつみ（グラフィックデザイナー・アートセラピスト）、ほか

主催：第 14 回全国障がい者芸術・文化際とっとり大会実行委員会

2016年3月 @鳥取県立生涯学習センター

登壇：久保田 翠（クリエイティブサポートレッツ／愛知）、コ・ジェ・フィル（rawside／韓国）、中島 諒人（鳥の劇場／鳥取）、武捨和貴（リベルテ／長野）、角地智史（アートキャンブ新潟／新潟）、妹尾恵依子（アートスペースからふる／鳥取）、竹森民枝（はーとびあ創造／鳥取）、北村康弘（もみの木福祉会／鳥取）、ほか

主催：あいサポート・アートインフォメーションセンター

2017年3月 @鳥取市文化センター大会議室

テーマ：障害のある人のアートとデザインの可能性

登壇：中野厚志（ぬかつくるところ／岡山）、松田圭一（スカイハート灯／岡山）、阿曾麻里生（かざぐるま／奈良）、原田祐馬（UMA/design farm／大阪）、加藤未礼（おおきな木／東京）、高野賢二（クラフト工房 La Mano／東京）、金武啓子（西沢路希望の家美術部／大阪）ほか

主催：あいサポート・アートインフォメーションセンター

2018年3月 @とりぎん文化会館 展示室

テーマ：アートで生きるを考える

登壇：原田啓之（PICFA／佐賀）、山根大樹（おりもんや／鳥取）、水野浩世（YELLOW／大阪）、鰐坂 兼充（iTohen／大阪）、中島諒人（鳥の劇場／鳥取）、ほか

主催：あいサポート・アートインフォメーションセンター

2019年3月 @米子市立美術館

テーマ：Good Job! 社会を変えるデザインの力

登壇：上田祐嗣（アートセンター画楽／高知）、川崎富美（プロダクトデザイナー／鳥取）、八渡和仁（レストラン&カフェ白壁倶楽部／鳥取）、森口 誠（暮らしランプ／京都）、山崎慎也（ライフスペース・プロペラ／兵庫）、西脇大祐（ワークセンターとよなか／大阪）

主催：あいサポート・アートインフォメーションセンター

2019年11月 @鳥取市文化センター 大会議室

テーマ：地域をかえるアートの力

登壇：武捨和貴（NPO 法人リベルテ／長野）、岡崎 潤（デザイナー造形教室／大阪）、妹尾恵依子（アートスペースからふる／鳥取）、木野彩子（ダンサー・鳥取大学地域学部附属芸術文化センター／鳥取）、中野厚志（生活介護事業所ぬかつくるところ／岡山）、原田啓之（PICFA／佐賀）

主催：あいサポート・アートインフォメーションセンター

福島

2013年1月 @南相馬ファクトリー、つながっぺ南相馬、郡山市総合福祉センター

登壇：甲斐賢治（せんだいメディアテーク／宮城）、佐藤定広（南相馬ファクトリー／福島）、田口ひろみ（工房地球村／宮城）、吉田修一（工房まる／福岡）、鈴木康弘・富永美保（JDF 被災地障がい者支援センター ふくしま／福島）

主催：エイブル・アート・ジャパン

協力：被災地障がい者支援センターふくしま（福島県障がい者自立支援拠点整備事業）、一財団法人たんぼの家、特定非営利活動法人まる、エイブルアート・カンパニー

助成：財団法人 JKA 平成 24 年度（復興支援）被災者に対する生活支援活動補助事業

岩手

2013年3月 @アイーナいわて県民情報交流センター

登壇：湊 直司（わかたけ学園／岩手）、竹下敦子（ハックの家／岩手）、昆野香代子（いきいきフェア実行委員会／岩手）、吉田修一（工房まる／福岡）ほか

主催：エイブル・アート・ジャパン

共催：一般財団法人たんぼの家、特定非営利活動法人まる、エイブルアート・カンパニー

助成：財団法人 JKA 平成 24 年度（復興支援）被災者に対する生活支援活動 補助事業

宮城

2013 年 1 月 @仙台市市民活動サポートセンター

登壇：渡部哲也（アップルファーム／宮城）、田口ひろみ（工房地球村／宮城）、吉川由美（八戸ポータルミュージアム「はっち」／青森）、岡田昌成（みやぎセルブ／宮城）、佐藤定広（南相馬ファクトリー／福島）、柴崎由美子（エイブル・アート・ジャパン／東京）、武田和恵（たんぼぼの家／宮城）、山中理恵（ひまわりパーク六本松／福岡）、伊原亜希子（デザイナー／東京）、藤本光浩（マジェルカ／東京）

主催：エイブル・アート・ジャパン

協力：みやぎセルブ協働受注センター、一般財団法人たんぼぼの家、特定非営利活動法人まる、エイブルアート・カンパニー

助成：財団法人 JKA 平成 24 年度（復興支援）被災者に対する生活支援活動 補助事業

2015 年 2 月 @仙台市市民活動サポートセンター

登壇：深野善人（日本 NPO センター タケダいのちとくらし再生プログラム／東京）、今野真理子（みどり工房若林／宮城）、ささきりえ（造形家／宮城）、森伸也（のぞみ福祉作業所／宮城）、前川雄一（デザイナー／静岡）、岸田恵奈（AARJapan[難民を助ける会]／東京）、武田和恵（エイブル・アート・ジャパン／宮城）、松浦繁（造形家）、扇 ひろみ（彫刻家）、阿部慶子（アーティストの家族）、田口ひろみ、刈田路代（工房地球村／宮城）、宮川和子（ペンギンズアート工房・宮城県立石巻支援学校／宮城）、齊藤 基（宮城県障害者福祉センター・まっくらやみ仕事人／宮城）、佐々木明子（まっくら企画／宮城）、

主催：一般財団法人たんぼぼの家（第 1 部）、エイブル・アート・ジャパン（第 2 部）

協力：日本 NPO センター（第 1 部）、AARJapan[難民を助ける会]（第 1 部）、みやぎセルブ協働受注センター（第 1 部）、てつがくカフェせんだい（第 2 部）、「障害者の芸術活動支援事業@宮城」厚生労働省・障害者の芸術活動支援事業（第 2 部）

助成：タケダいのちとくらし再生プログラム（武田薬品×日本 NPO センター協働事業）

愛媛

2016 年 10 月 愛媛県美術館

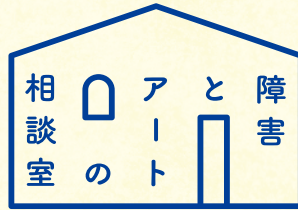
登壇：木ノ戸昌幸（スウィング／京都）、石村嘉成・和徳（アーティストと家族／愛媛）、田村恵理（スマイルスタッフ／愛媛）、日垣雄一（YELLOW／大阪）、坂部 認（多夢多夢舎中山工房／宮城）、宮本恵美（工房集／埼玉）小林大祐（たんぼぼの家／奈良）

主催：愛媛県

企画協力：エイブル・アート・ジャパン、一般財団法人たんぼぼの家

協力：特定非営利活動法人アトリエ素心居

助成：「三浦保」愛基金



たんぽぽの家では、障害のある人の芸術活動について、全国の福祉やアート分野の人たちとともに課題を共有し学ぶ機会をつくってきました。2014 年からは、障害のある人、その支援者の課題解決、また情報交換やネットワークづくりの場として「障害とアートの相談室」をオープン。障害のある人の表現を通して、誰もが自由に表現できる社会、いきいきと生活できる社会を目指します。

1. 相談窓口の設置

2. 研修事業（セミナー、施設見学ツアーなど）の実施

著作権など、表現と知的財産に関する研修や相談も受け付けています。詳しくは → cihzai.goodjobcenter.com まで。

3. ネットワークづくり、作品、作家の調査・発信 (調査、書籍の出版、展覧会開催など)

知財の相談は「障害とアートの相談室」で受付中！

障害とアートの相談室

で検索してみてください！

<http://artsoudan.tanpoponoye.org>



- アートをとおした仕事づくりについてのお問い合わせは → gj@popo.or.jp まで。
- アートと知的財産についてのお問い合わせは → chizai@popo.or.jp まで。

発行物のご案内

「障害とアートの相談室」では、調査や研修、事業などの成果をより多くの人と共有できるように発行物を制作しています。それぞれ、障害とアートの相談室の Web サイトより PDF をダウンロードできます。

なやんで ひらいて 2 歩すすむ ためのハンドブック



障害のある人のアート活動を支援する人や当事者などの具体的な課題をマンガで紹介。また 40 人の先進的な活動を行う実践者の考えや取り組みの事例を掲載。(2015 年 3 月発行)

地域にひろがるオープンアトリエ すすんで ひらいて つながるためのハンドブック



障害のある人がアートを楽しめる地域にひらかれた「オープンアトリエ」。全国各地の先進的な事例とマンガで、オープンアトリエの考え方や方法を紹介。(2016 年 3 月発行)

あなたの「ものさし」聞かせてください！ トークシリーズ障害のある人のアートと評価



芸大、美学・哲学、美術館、ギャラリスト、障害のあるアーティスト、さまざまな視点から、障害のある人のアートの評価をひもとく講義録。(2017 年 3 月発行)

オープンアトリエのつくりかた 表現の場をひらいてつながるためのヒント集



「自分のスペースをもっとひらいていきたい」「表現を通じて交流の場づくりをしてみたい」と考えている人たちに向けた、具体的な一歩を踏み出すためのヒント集。(2021 年 3 月発行)

その他、有料書籍の情報追加も予定しています。

障害とアートの相談室

福祉がかわれば社会がかわる 福祉をかえる「アート化」セミナー ガイド

発行日 2022 年 3 月 31 日
発行元 一般財団法人たんぽぽの家
〒630-8044 奈良県奈良市六条西 3-25-4
Tel 0742-43-7055 Fax 0742-49-5501
Email artsoudan@popo.or.jp
URL <https://artsoudan.tanpoponoye.org/>

企画・執筆 岡部太郎、中島香織（一般財団法人たんぽぽの家）、
森下静香（GoodJob! センター香芝）
編集 奥田奈々子
組版 鯉坂兼充
印刷 グラフィック株式会社

